

支部活動

九州支部

□第42回

日本肺癌学会九州支部会

平成14年7月18日(木)・19日(金)

北九州国際会議場

当番幹事 安元公正

(産業医科大学第2外科学教室)

S-1. 肺がんの早期診断マーカー
hnRNP B1の臨床的意義

佐賀医科大学内科

末岡尚子, 岩永健太郎, 林真一郎

末岡栄三朗

佐賀県立病院好生館

富永正樹

hnRNP B1は、RNAのスプライシングや核外輸送に関与していると共に最近ではテロメラーゼ活性の制御機能も報告されている。私共はhnRNP B1が肺がんの早期より過剰発現する事を見出し、肺がん早期診断マーカーとしての可能性について検討してきた。免疫組織化学法において、進行性肺がん43例中36例(83%)、特に、扁平上皮がん、臨床病期I期全例(14/14)でhnRNP B1の発現亢進を認めた。微小肺がんでは43例中25例(58.1%)にhnRNP B1の発現亢進を認め、がんの進達度と相関する傾向を示した。気管支異形成においても11例中7例(63.6%)に発現亢進を認めた。hnRNP B1は肺がんの初期変化を反映する新しい早期診断マーカーと考え、現在、臨床応用への検討を行なっている。

S-2. 非小細胞肺癌における活性型EGFRバリエント(EGFRvIII)の発現と活性化

熊本大学第1内科

岡本 勇, 佐々木治一郎, 森山英士

市川靖子, 菅 守隆, 松本充博

同 第1外科 森 毅, 吉岡正一

Thomas Jefferson Univ.

Albert J. Wong

EGFRチロシンキナーゼ阻害薬(ZD1839)の開発により、非小細胞肺癌に

おけるEGFRシグナリングの評価は益々重要性を増すと考えられる。EGFRvIIIは各種癌組織において最も高頻度に見られる変異型EGFRであり、リガンド非依存性にそのチロシンキナーゼ活性が亢進しているとされている。我々はEGFRvIIIに対するモノクローナル抗体を作成し、非小細胞肺癌における発現を調べ、さらにリン酸化特異的抗EGFR抗体を用いることによりそのチロシンキナーゼ活性化を検討した。EGFRvIII発現はZD1839使用の際の症例の選択に有用ではないかと考え、今後検討する予定である。

S-3. 小細胞肺癌におけるP-glycoprotein, MRP1, MRP2及びp53の発現と化学療法感受性に関する検討
九州大学大学院胸部疾患研究施設

石橋里恵, 中西洋一, 出水みいる

猪島尚子, 綿屋 洋, 南 貴博

堀内康啓, 内野順治, 原 信之

【目的】P-glycoprotein (Pgp)やMultidrug resistance protein (MRP)は、薬剤排出ポンプとして働き、癌細胞の薬剤耐性に寄与している。p53はDNA修復やアポトーシス誘導に重要で、その変異は化学療法抵抗性の要因となりうる。Pgp, MRP1, MRP2, p53の発現と臨床病理因子、化学療法感受性との関連について検討する。【方法・対象】経気管支肺生検にて小細胞肺癌の診断に至った62例について免疫組織学的に評価した。【結果】PgpとMRP2は、陰性群で化学療法の奏効率は有意に高かった。多変量解析の結果も併せて報告する。

S-4. Flexible-Bronchoscopeを用いた胸腔鏡検査による癌性胸膜炎の診断

熊本地域医療センター呼吸器科

千場 博, 瀬戸貴司, 佐伯 祥

竹田佳代

胸水分析の結果、浸出性であり、細

胞診陰性・リンパ球優位・ADA低値が原因不明胸膜炎であり、胸膜生検の適応となる。我々は、このような症例に対して1989年からFlexible-Bronchoscopeを用いて胸腔鏡検査を行っている。2001年までに110例にこの方法で胸膜生検を行っているが、癌性胸膜炎と判明したものが25例、結核性胸膜炎28例、非特異的炎症40例、不明17例であった。胸水細胞診陰性癌性胸膜炎27例中25例はこの方法で癌性胸膜炎と診断された。Flexible-Bronchoscopeは呼吸器内科医にとって使い慣れたものであり、また簡便であり、この方法は癌性胸膜炎の確定診断に非常に有用である。

S-5. 肺癌診療における術中迅速細胞診の有用性—末梢小型肺癌に対する積極的な胸腔鏡利用—

国立療養所福岡東病院呼吸器外科

岡林 寛, 前川信一, 鉢嶺 顕

同 呼吸器科

原田大志, 高田昇平, 田尾義昭

宮崎正之, 岩永知秋, 二宮 清

原 信之

【目的】肺末梢小型陰影の診療機会が増えている。当院での術中迅速穿刺吸引細胞診(NAC)の有用性、および胸腔鏡下NACの意義を検討した。【対象】過去10年間に当院で施行した術中迅速NAC例159例を対象。うち胸腔鏡下NAC症例は13例。【方法】ミニ開胸か鏡視かは病変に応じ選択。21か22G注射針でNACを施行。【結果】平均診断時間は8分。全体での的中率95.6%、擬陽性率4.2%、擬陰性率4.6%、特異度95.4%、感度95.8%であった。胸腔鏡での診断率もほぼ同じ。【結語】一期的な診断→治療への術中迅速(NAC)は正診率が高く、診療期間短縮、経費節減など肺癌診療に有意義である。

S-6. スリガラス影(GGO)を有する

小型腺癌の治療方針に関する検討

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科腫瘍外科

赤嶺晋治, 岡 忠之, 田川 努
永安 武, 村岡昌司, 綾部公懿
同 放射線科 南 和徳, 芦澤和人
スリガラス影 (GGO) を有する小型腺癌 120 例について, HRCT にて GGO の腫瘍に占める割合を retrospective に評価し, 縮小手術の適応について検討した。GGO の腫瘍に占める割合から A 群: 0% (n=53 例), B 群: 50% 未満 (n=41 例), C 群: 50% 以上 (n=26 例) に分けた。C 群にリンパ節転移はなかった。胸膜浸潤は C 群ではみられなかった。脈管侵襲は GGO の割合が増加するほど有意に低率であった。C 群に局所再発はなかった。術死・他病死を除いた 5 年生存率は A 群 81.8%, B 群 64.8%, C 群 94.7% であった。以上より GGO の割合が 50% 以上の小型腺癌は縮小手術の適応となりうることが示唆された。

S-7. 肺癌診断と治療への新しい取り組み

福岡大学第 2 外科

犬束浩二, 白石武史, 岩崎昭憲
平塚昌文, 濱武大輔, 平山 伸
柳澤 純, 川原克信, 白日高歩
鹿児島今給黎病院 米田 敏
福大筑紫病院 山本 聡

肺癌は特に高齢者に多く発生し多様性に富む事から, 個々の症例に対し QOL を重視したオーダーメイドの治療が必要である。治療面では GGO 主体の末梢小型肺癌に対し積極的な区域手術を導入しており, その場合可能であれば胸腔鏡手技を展開させている。他方で進行癌—手術不能例には腫瘍内科による外来・入院治療が実施され oncologist と surgeon の役割分担を明確化してきた。その他癌性胸膜炎症例に温熱灌流化学療法を実施しており一部の症例で症状の改善がみられ有効であった。診断面では LIFE (蛍光気管支鏡) による中心型早期肺癌の検索を試みたが極めて有用との感触は得られなかった。

S-8. 肺癌細胞株樹立と腫瘍抗原の

同定

産業医科大学第 2 外科

菅谷将一, 竹之山光広, 水上真紀子
宗 哲哉, 市来嘉伸, 安田 学
宗 知子, 山下智弘, 小山倫浩
森田 勝, 矢野公一, 杉尾賢二
安元公正

【はじめに】肺癌に対する免疫療法を確立するためには, 自家癌に対する特異的免疫応答の証明が必要であり, 今回肺癌患者より樹立し得た癌細胞株に対する免疫応答を検討した。【結果】1) 肺癌患者 570 例の切除標本もしくは癌性胸水より 15 例 (2.6%) において癌細胞株を樹立した。2) MHC class I および class II は各々 12 例 (80%), 3 株 (20%) であった。3) 成功率は Stage I および Stage II の群と比較して進行した Stage III および Stage IV の群において有意に高率であった ($p=0.004$)。4) class I を発現した 8 株の症例において細胞障害性 T リンパ球 (CTL) を誘導したところ全例で CTL を樹立し得た。【まとめ】肺癌細胞にも腫瘍抗原が多く存在し, 腫瘍抗原同定とその臨床応用により今後の新しい肺癌に対する特異的免疫療法が期待できる。

1. 紡錘細胞・巨細胞を含む肺癌の画像所見および臨床病理学的所見
産業医科大学放射線科

青木隆敏, 鞆田義士, 渡辺秀幸
中田 肇
同 第 2 外科 杉尾賢二, 安元公正
同 呼吸器科 城戸優光
同 第 1 病理 橋本 洋

紡錘細胞・巨細胞を含む癌は 1999 年の新 WHO 組織分類に新たに加えられたカテゴリーの一つである。病理組織所見を免疫組織化学を含めて再検し, 紡錘細胞・巨細胞を含む癌と診断された 25 例の画像所見および臨床病理学的所見を検討した。男性 18 例, 女性 7 例と男性に多く, 92% に喫煙歴があり, そのほとんどが重喫煙者であった。HRCT では腫瘍内壊死を反映した中心部低吸収域や空洞, 胸壁/縦隔浸潤, 肺気腫など既存肺病変の合併が高頻度に認められた。中心部低吸収域や

空洞, 胸壁/縦隔浸潤を呈した症例の多くは紡錘細胞成分や巨細胞成分が 50% 以上を占める腫瘍であった。

2. 当院における胸部 CT 検診 1 年の経験

長崎市立市民病院内科

阿部 航, 川上かおる, 道津安正
神田哲郎

同 放射線科 南 和徳, 福田俊夫
我々は 2001 年 3 月より希望者に胸部 CT 検診を行ってきた。対象は人間ドックと肺癌検診受診者とした。方法は GE 社製 Light Speed QX/i, スキャン時間 0.8 秒/1 回転, 撮像条件 120 kV, 30 mA (16 mAs), スライス厚 5 mm, Pitch 6 (High speed mode) で撮影した胸部 CT 写真を当院放射線科医と呼吸器専門医が二重読影を行った。対象は 143 例, 男性 83 例, 女性 60 例であった。うち人間ドック 118 例, 肺癌検診 25 例であり, 喫煙者が 64 例, 非喫煙者が 79 例だった。年齢的に 50 代 50 例, 60 代 46 例で全体の約 2/3 を占めた。精査の結果, 肺癌と診断されたものは 1 例だったが限局性の GGO 症例も数例認められており, 検診結果について報告する。

3. 肺癌検診における間接撮影と直接撮影の比較

琉球大学医学部附属病院手術部

久田友治
沖縄県総合保健協会

仲宗根恵俊, 大城盛大

目的: 肺癌検診の有効性が議論され, 一方では CT 肺癌検診が試みられている。検診の多くは間接撮影で為されているが, 直接撮影との比較が少ないので両者の比較を行う。方法: 対象は沖縄県総合保健協会の平成 8 年から 12 年の検診受診者。全体 (職域検診と地域検診) および職域検診のそれぞれで間接撮影と直接撮影の読影数, 肺癌発見率 (10 万対) を比較した。全体では間接撮影の年齢が直接撮影のそれより高齢であり, 職域検診では年齢分布は同様であった。結果: 間接撮影の読影数は微増。直接撮影の読影数は女性では減少傾向。男性の肺癌発見率は両撮影共に増加。男性では直接撮影によ